

『メイおぼちゃんの庭』における風舞の象徴性
— 視覚化と愛の継承・顕現 —

はじめに

文学批評のジャンルに児童文学が加わってからどれぐらいたつのだろうか。もちろん、ほかのジャンルに比べて新しいものであり、研究者も女性が多いというのがこの分野の特徴である。子供の心を理解する母性が、研究にも生かされるのは、無理もない事であろう。研究とは全ての人間活動を内包するものなのである。

読者の心に静かな感動を染み込ませるシンシア・ライラント (Cynthia Rylant, 1954-) の『メイおばあちゃんの庭』 (*Missing May*, 1992)¹ はおばメイ (May) の死と残された人間の悲しみからの回復を愛情の観点から語る児童文学である。主人公サマー (Summer) の語りを通して話が展開するが、作品中で起こる事と言えば、メイの死をきっかけに落ち込むおじオブ (Ob) を勇気づけるためにサマーとサマーの友人クリータス (Cletus) と共に霊媒師の元へメイと話をするために出かける。だが、結局霊媒師には会えず、帰ってくるだけ、というものである。作品中の出来事によって話が展開していく物語ではないのである。いわばサマーやほかの登場人物の心に焦点を合わせた作品と言えるであろう。

児童文学一般について述べる批評をここで紹介してみたいと思う。ミリアム・G・マルティネス (Miriam G. Martinez) は1990年代以降の児童文学の特徴と批評に値する基準の児童文学とは「子供と子供たちの経験の多様性を反映する本」 (“books that reflect the diversity of children and their experiences”) (161) と述べている。そしてナンシー・J・ジョンソン (Nancy J. Johnson) は児童文学の読書と子供たちの教育プログラムの観点で、読書が与えるテーマについて明白な意見を述べている。つまり「読書とはいつも何かについてであり、文学はどんなジャンルや形式においても、想像上のあらゆる話題に基づきうるものである」 (“Reading is always about something, and literature in all genres and formats can be found on every subject

imaginable ”)(710)と述べている。最後にシンディ・ジョージス (Cyndi Giorgis)は『メイおばあちゃんの庭』の形式にも当てはまる、児童文学の小説という形式について「これらの小説は長めであり、成熟した理解のための言葉や話題が特徴的である。そしてアイデンティティや独立を探し求める登場人物が含まれるものである」(“ these novels tend to be longer in length; feature language and topics for more mature understanding; include characters seeking identity and independence ”)(828)と述べている。

これら3人の批評家の意見を参考にすれば、ほとんど何も起こらない『メイおばあちゃんの庭』についても、何かしらのテーマを考えるのが普通なのである。全ての文学にテーマがあるというわけではない。しかし子供の心に印象を残す『メイおばあちゃんの庭』にはやはりテーマがあって当然なのである。テーマを表す方法には色々なものがあるが、私がここで注目してみたいのは、シンボルについてである。シンボルとテーマを結び付ける事は、児童文学に限らず、文学全般について当てはまる事ではないだろうか。

サマーのおじオブは風舞を作り、それは「愛」、「死」、「魂」など目で見ればっとわかるようなものではない。犬や鳥など具体的なものではないのである。メイが生きていたころ、天井の扇風機のスイッチを入れ風舞が動き始めると、サマーは「自分が魔法の少女のようであり、選ばれた少女、不思議の国に落ちたアリスのようで、この気持ちは今でも残っている」(“ I felt like a magical little girl, a chosen little girl, like Alice who has fallen into Wonderland. This feeling has yet to leave me ”)(7)と感動を覚えるのである。サマーが初めてメイの家に来た時に見た風舞の象徴性を考える事は重要ではないだろうか。本稿では風舞というシンボルを作品のテーマと結びつけ、何を一体表すのかという事を考えてみたいと思う。本稿の目指すところは、風舞の象徴性を明

らかにする事である。

1. サマーの能力

『メイおばあちゃんの庭』の主人公はサマーである。母親を亡くしたサマーは、母親の兄弟の間をたらい回しにされ、メイとオブに引き取られたのである。しかし、サマーはひねくれることなく、人に対して意地悪くなったり、恨むようになっただけはしなかったと自ら語っている(4)。その理由としてサマーは母親から受け継いだ愛を説明しているが、彼女の「私は自分の中に愛を沢山持っていた。再び愛を見たり、感じた時に愛が何であるかが分かるぐらいにだ」(“I'd have enough love in me to know what love was when I saw it or felt it again”)(4)という言葉は、彼女の性格の優しさを示唆するのに十分な証拠になるのではないだろうか。愛を感じられる人間は同時に愛を与える可能性を秘めているのである。実際にメイとオブにとって、サマーは「天使」(“an angel”)(5)というように、引き取られる際に考えられていたのである。引き取られながらも与える存在というサマーの働きが分かるのではないだろうか。

メイが亡くなった後のサマーはオブと二人で暮らし始めるわけだが、サマーはどのような役割を果たすようになるのだろうか。落ち込むオブに対してとるサマーの態度をここで引用してみたいと思う。死んだメイと会うために霊媒師の元へ行くことに決めた直後のサマーの様子である。

I saw that grin on his face, that glint in his eyes, and I knew that Ob had suddenly found himself a reason to get out of bed on time in the mornings, at least for a little while longer. The three of us might look like complete pure fools tracking down this preacher lady and her bats. But if it kept Ob

grinning and chasing after some hope, I knew I'd have to be willing to follow him. (54)

私は笑顔と目の中の輝きを見て分かったのだ。突然オブは、毎朝、少なくともしばらくの間は、時間通りに起きる理由が出来たのだ。巫女と蝙蝠を探しに行くなんて全くの馬鹿のように私たち3人は思えるかもしれない。でもそれがオブをにこにこさせて希望を追いかけさせるのだったら、私も喜んで彼に従うべきだと分かっていた。

オブを気遣い馬鹿げているとは思いながらも、計画を実行しようとするサマーの様子を見て取れる。これはサマーの示す愛情であり、彼女の与えている愛情である。オブに生活の面倒をみてはもらっているが、同時にサマーも与える存在になっているのである。メイが生きていた頃も、彼女が亡くなった後も、サマーの与える役割に変化はないと言えるであろう。

児童文学の特徴の一つとして、ナンシー・J・ジョンソン(Nancy J. Johnson)などによる共同研究によると家族の意味を挙げている。それによると「家族の意味を読者に提供する文学は、自己の成長の意味への示唆をも提供するかもしれない」(“Literature that provides readers with a sense of family might also provide a peek into a growing sense of self”)(434)と述べているが、読者の反応を考えるならば、サマーのこうした家族という母性的役割は、読者の自己成長の機会を与えると同時に、サマー自身の成長の感覚に共感を覚えさせるものではないだろうか。サマーは与えられながらも与える存在であることはすでに述べたが、サマー自身も成長を経験する人物なのである。クリータスをはじめは嫌いながらも、やがてオブを勇気づけるためのパートナーとして認識し始める事などは、サマーの変化であり、寛大さを持つようになったサマーの成長でもあるのである。²愛を与えられながらも愛を与える

存在、そして自分自身が変化していく登場人物というようにサマーを説明する事が出来るのではないだろうか。

作品終盤で涙を流す感情の解放によってさらなる変化を経験するサマーであるが、クリータスを認めるようになるという第一の変化は、サマー自身に自分では気づかない己の特徴を見出させるように思える。エブリン・B・フリーマン (Evelyn B. Freeman) による児童文学の考察、「注意深い描写と強力な対話、互いに助け合う登場人物の考えと感情を通して、読者は新しい時代と場所を訪問し、他者の人格と見方を知るようになるのである」(“Through careful descriptions, powerful dialogue, and the thoughts and feelings of supporting characters, readers visit new times and places and get to know the personalities and perspectives of others”)(588)という考え方は、あくまで読者に対しての児童文学の影響を述べたものであるが、サマーという登場人物に対しても当てはめられる考察である。サマーはクリータスとの対話によってクリータスの人格と見方を理解するようになるのである。読者と登場人物の混同を無批判に行うのは危険であるが、実際に以下の場面でサマーはクリータスに対して新たな考えを抱くなるようになる。そしてクリータスの述べるサマー自身に対しての考察を無視する事は出来なくなるのである。クリータスによるオブとサマーに対しての考察をここで引用してみたいと思う。

Cletus looked up at my face.

“ Ob’s got visions, Summer. Just like you, except you’re always fighting yours off. ”

And when Cletus said that, I felt like I couldn’t ever win anymore, I couldn’t ever come out on top of anything in this life. I couldn’t even remember what it was about Cletus I used to hate so much. I couldn’t even stay ahead of him.

(39)

クリータスは私の顔を見上げた。

「オブには見抜く力があるんだよ。サマー、君みたいにね。でも君はいつもそれを追い払おうとしているんだ」

クリータスがこう言った時、私はもう勝てない、もう私の人生で何も競争には勝てないような気がした。クリータスのどこがあんなに嫌いだったかさえ思い出せなかった。彼の前に立っていることさえも出来なかった。

サマー自身がオブと同じように持っている「見抜く力」、自分では否定しながらも確実に持っているこの力の存在を言い当てられ、サマーはどうしていいか分からず、この言葉の後にクリータスの前から立ち去ってしまうのである。「見抜く力」を持つ重大きゆえのショックであるに違いないのである。³

サマーは愛に対しての感受性というものが非常に大きく、メイが生きていた頃、オブと仲良くしている光景をみて、森に駆けこんで泣いてしまいたかったと述べている(4)。これは悲しみからではなく、幸福感によるものだと言っているように、何気ない日常の光景に大きな幸せを感じたサマーの「見抜く力」によるものなのである。

そしてクリータスにサマー自身の「見抜く力」を言い当てられた後にもサマーは自身の「見抜く力」を発揮する。なかなか朝起きてこないオブが暗がりの中で、座っている時のサマーの注意力を考えてみたいと思う。「私は彼の頬を涙が転がり落ちるのを見た、あるいは感じた」(“ I could see, and feel, that tears were rolling down his face ”)(45)。暗がりの中では見えるはずのない涙を見るように感じたサマーである。見えないものを見るサマーの「見抜く力」の一例として挙げられるのではないだろうか。

サマーの与えられながらも与える力、そして愛への感受性、オブの悲しみに対しての共感力、いずれも見た目にはわからない、

見えないものを見せる、あるいは見るサマーの能力である。サマーの特徴が明らかになったのではないだろうか。

2. トレーラーハウスと議事堂の共通点

サマーがメイとオブと共に生活するのはトレーラーハウスである。決して裕福とは言えないメイとオブから愛情を受けるのは、このトレーラーハウスにおいてなのである。この節ではサマーが特定の印象を持つ生活の場トレーラーハウスとよその土地で見た議事堂という建物の共通点をさぐり、サマーにどのような印象と影響を及ぼすかを検討してみたいと思う。

サマーを引き取ったメイとオブは年老いた老人である。愛情を惜しみなく与える二人であるが、老人なのである。二人が生活してやがてサマーと三人で生活するようになるトレーラーハウスの様子をここで引用してみたいと思う。

Home was, still is, a rusty old trailer stuck on the face of a mountain in Deep Water, in the heart of Fayette County. It looked to me, the first time, like a toy that God had been playing with and accidentally dropped out of heaven. Down and down and down it came and landed, thunk, on this mountain, sort of cockeyed and shaky and grateful to be all in one piece. Well, sort of one piece. Not counting that part in the back where the aluminum's peeling off, or the one missing window, or the front steps that are sinking. (5)

家は、今でもあるけれど、古いさびだらけのトレーラーハウスで、フェイウェット郡中央部のディープ・ウォーターの山の中にある。初めて見た時、天国で遊んでいた神様がうっかり落としてしまったおもちゃみたいに感じた。このトレーラ

ーハウスが下へ下へと落ちていき、着陸してこの山にぶつかって、曲がってしまいガタガタになった。ばらばらにならなかったのが幸いだったという感じだ。そうはなっていないが、裏のアルミニウム板が剥がれて、窓が一枚なく、玄関のステップが無くなっていた。

このトレーラーハウスは、年老いたメイとオブの夫婦のように古さが特徴的なのがわかるであろう。そして破損に代表されるように貧しさも感じさせるものである。住まいが一軒家ではなく、トレーラーハウスというのも十分に貧しさを感じさせる事であるが、このトレーラーハウス自体も老朽化しており、貧しいという印象をさらに助長するようなものになっている。

しかし、サマーのこのトレーラーハウスの印象はどうだろうか。古いトレーラーハウスであり、壊れているものであるが、サマーは神という言葉を使っているのである。神が遊んでいたおもちゃであり、神性を帯びているものなのである。サマーはこのトレーラーハウスに、それほどマイナスの印象を持っていないのは注目すべき事ではないだろうか。

メイはこのトレーラーハウスを子供向きの家に変えようとしたわけであるが、サマーはマイナスの印象どころか「トレーラーの中に入ると直ぐに大掛かりな模様替えなんて必要なく、小さな女の子が喜ぶには十分だった」(“when we got inside the trailer, it became plain to me at once that they didn't need to do any great changing to make a little girl happy”)(6)という印象を持つ。なぜならそこには部屋中に風舞が飾ってあったからである。この風舞こそサマーを喜ばせ、幸せな気持ちにさせたものなのである。

外見のみすぼらしさの中にあるものは、サマーを幸せにする風舞の存在である。物理的な外と内の差のみならず、トレーラーハウスの示す古さとみすぼらしさは、サマーの内面の幸せと明らかな対照をなすものなのである。トレーラーハウスの外見には似合

わない、内面の豊かさを与える特徴が明らかなのではないだろうか。

サマーたちの心に影響を与えるもう一つの建物、議事堂について考察してみよう。霊媒師に会うために車で出かけたサマー、クリータス、オブの3人が議事堂を見るのは、作品の終盤においてである。一般的な小説でも終盤の重要性というのは無視できるものではないが、パメラ・マーフィ(Pamela Murphy)はなぜ終盤が重要か、というのを説明するにあたり、以下のような言葉を述べている。つまり「まず間違いなく、終盤は最も物語において論点となる部分である。なぜならそれらは、読者の最後の印象となる部分だからである」(“ Arguably, endings are the most critical part of a story because they are the reader’s last impression of the piece ”)(461)という端的な説明である。私自身も『メイおばあちゃんの庭』における終盤の部分、議事堂に対するサマーの反応は無視できないものだと思う。トレーラーハウスと同様にサマーの心は大きくこの議事堂によって動かされるのである。

議事堂通りの標識を何キロも前から目にして、楽しみに議事堂を待っていたサマーはついにこの建物を目にする。その瞬間の様子をここで引用してみたいと思う。

The capitol building sprawled gray concrete like a regal queen spreading out her petticoats, and its giant dome glittered pure gold in the morning sun. I felt in me an embarrassing sense of pride that she was ours. That we weren’t just shut-down old coal mines and people on welfare like the rest of the country wanted to believe we were. We were this majestic, elegant thing sitting solid, sparkling in the light. (70-1)

議事堂は灰色のコンクリートを女王陛下がスカートを広げる

みたいに広げていた。そして巨大なドームが朝日の中で純金のように光っていた。私は自分の中でそれこそが私たちである、という誇らしいが恥ずかしさもある感じを持った。私たちはほかの場所の人たちが思っているように、閉鎖された炭鉱ではないし、福祉にお世話になっている人ではない。私たちはこの威厳があり、優雅に堂々と居を構える建物なのだ。光の中で輝いているのだ。

サマーはこの議事堂という建物と自分たちを同一視しているのが明らかであろう。支配的なイメージとは光あふれる威厳であり、重要性である。自分たちの存在の重要性を意識しているのである。女王陛下に建物をなぞらえ、それを自分自身と同一視している点など、重要性を喚起させる表現は、はっきりしているのではないだろうか。

閉鎖された炭鉱や福祉の世話になっている人たちという、よその人間の評価は、ちょうどサマーを見る他人の眼差しと一緒にである。親戚中をたらい回しにされ、貧しい老人二人と生活するようになったサマーへの眼差しは、高い評価であるはずがない。しかし、メイとオブの愛情によって幸福を感じているサマーは、自分の生活こそが真実であり、他者の冷たいまなざしは、無関係であり間違った見方である、と考えている。サマーは愛という豊かさがある生活と、議事堂の優雅さをここで重ねて、自分自身に誇りを感じているのである。トレーラーハウスと議事堂、この2つの建物はサマーにとって自分の存在意義を感じる事が出来る重要なものになっているのが、わかったのではないだろうか。

トレーラーハウスの古さ、みすぼらしさ、貧しさと議事堂の建つウエスト・ヴァージニアに対する世間の冷たい眼差し。この二つはサマーの心にマイナスの感情を及ぼすものではない。暗さの中の光ともいべき真実がこの二つの建物には、共通点として存在しているのである。

結論

第1節ではサマーの与えながらも与える力、愛への感受性、オブの悲しみへの共感力という見た目にはわからない、見えないものを見る、あるいは見せるサマーの能力に注目してみた。第2節ではトレーラーハウスと議事堂の共通点を挙げて、外や他者からの見た目ではわからない真実、愛のある生活や世間の評価を裏切る暗さの中にある光の共通点を探ってみた。第1節、第2節とも視覚の要素を論じているのがわかるであろう。視覚が重要な要素と筆者は考えるのである。

マリアンヌ・サカルディ (Marianne Saccaridi) は「例えばシンシア・ライラントは、絵本も小説もたくさん書いているが、全ての年代の子供にとって深く研究するのに素晴らしい著者である」 (“ Cynthia Rylant, for example, who has written a wealth of both picture books and novels, is an excellent author for children of all ages to study in depth ”)(322) と評価をくだし、ライラントは「どこにでもいるような若い子供たちが直面する問題にユーモアがあり、そして実際的な解決を提供する本」 (“ books which serve up humorous and practical solutions to problems faced by young children everywhere ”)(322) に特徴があると述べている。サマーは問題を解決する事が出来たのだろうか。

霊媒師に会えず、家についたサマーはふくろうが飛び立つのを見て急に泣き出す。メイを思い出して泣くことは今までになかったが、ふくろうが目の前から消えるという視覚の問題によって、泣くという感情の解放を行うのである。今までこらえてきた事、そして当たり前であるが、はっきり認識した事というのは、「私はこの世では決して、二度とメイには会えないんだ」 (“ I would never, ever, see May on this earth again ”)(83) という事実である。そして床につき、サマーは以下のような考えを持つのである。

I closed my eyes and thought of my poor young mama and May's poor mommy and daddy and my dear May herself. But I didn't dwell on them with pain or with fear. There was a tranquility in me that felt all right, and as I remembered them all, my tears dried up and I fell asleep. (84)

私は目を閉じて若くして死んだかわいそうな私の母親、メイのかわいそうな母親と父親、そして大好きなメイ自身の事を考えた。でも苦しみや恐れによって、これらを深く考えたわけではなかった。私は大丈夫だ、という落ち着いた気持ちになった。そう考えているうちに涙も乾き、眠りに落ちた。

自分の母親やメイの死を受け入れ、落ち着きを経験しているサマーである。これは涙を流すことによって、つらさを乗り越えたから到達できる境地であり、「人は永遠に別れ去るものではない」(“ People don't ever leave us for good ”)(84)というオブの言葉の意味を理解したゆえの感情であろう。

夢の中で死んだメイが現れ、ふくろうが現れた話をしてサマーがやって来た事への喜びを語るが、⁴サマーが家に帰った時に実際に飛び去ったふくろうと関連して、このふくろうは消えることも現れることも深く愛と関連していると言えるであろう。⁵愛の顕現と継承に関連しているのである。この点でも視覚が重要になっているのである。

本稿の論題は風舞の象徴性を考える事であった。視覚の重要性がここまでの説明で明らかになったと思うが、風舞と視覚が何か関連があるのだろうか。言うまでもなく風舞は風を受けて動くものである。いわば見えない風を視覚化する道具なのである。永遠の別れはない、という真理を認識し、苦痛から解き放たれたサマーは、今や新たな幸福にいるのである。これは最終場面で風舞を

外に出す日が「大変に明るい金色の日光」(“ brightest yellow sunshine ”)(88)がふりそそぐ日である、というのにも表されているのではないだろうか。見えていなかった感情、それは押しつぶされていた悲しみであり、隠そうとしていたものである。そこから、死んだ者たちからの愛の継承と存続する愛を意識して、自分の生き方を見出すのである。見えていない風を視覚化する風舞は、愛の存続とサマーの生きる指針を表すのである。この事は作品の終盤の「今やふさわしい場所を与えられて回転し、命のある風舞」(“ the whirligigs that now had a place to spin and fly and live ”)(89)という表現に明らかではないだろうか。⁶風舞とは死んだ者からの愛の継承と生きる指針の獲得を表すのである。⁷これが本稿の出した結論である。

死は避けられないものであり、死が終わりではなく完成である、と考えられる人はどれぐらいいるのだろうか。この小説の主人公のように幼い子供に、故人が人生を完成させたと思わせるのは、大変に難しい事であろう。人生の早い段階で読む児童文学に死のテーマを持ち出す事は、人生の意味を考えさせるのに適切な事である、と筆者は考える。人生の完成という死を意識するから生が充実するのであり、若い読者の人生は初期の段階で生を充実させようという方向に向かうのではないだろうか。死を受け入れるための手段の一つとなる『メイおばあちゃんの庭』である。

註

1. 以下、『メイおばあちゃんの庭』からの引用は、SCHOLASTIC, *Missing May*, 2003年の版に拠る。同書の翻訳は『いなくて寂しいメイ』などが考えられるが、本稿では一般的に広く使われている『メイおばあちゃんの庭』を使うものとする。
2. シャロン・タバースキ(Sharon Taberski)は子供に勧めるべき良い本として「主人公がある変化をする、あるいは問題を解決する」(“the main character to change in some way or to solve a problem”)(587)という特徴を述べているが、この基準に従うなら『メイおばあちゃんの庭』は子供に勧めるべき良書という事になるであろう。
3. クリータスのサマーに対する評価は、同時にクリータス自身の見抜く力を証明するものでもある。風変りではあるが、サマーに影響を与えるクリータスの存在は重要である。
4. エブリン・B・フリーマン(Evelyn B. Freeman)は小説における内面の声を重視して、「内面の声は私たちが自分自身の考えと感情を理解して、個性を表現する道を提供するのに役立つ」(“Inner voice lead us to understand our own thoughts and feelings and provide an avenue to express our individuality”)(155)と説明しているが、夢も内面の声の一つと考えられるであろう。
5. エジプトの象形文字ではふくろうは死を表し、またバビロンではふくろうの夜の鳴き声は、お産で死んだ女による子を求める鳴き声とされた。死者とふくろうは結び付けやすいものであり、メイとの関連もつけやすいのではないだろうか。
6. 風と神性は度々関連付けられるが、聖書において例えば、創世記第2章7節には人間の創造にあたり、人間に命が与えられたのは神の息吹という風である。命を持つ風舞とサマーの新しい道に関連するのである。

7. メイの表す「5月」と主人公の名前サマー「夏」には時間の連続が感じられる。5月が終わり夏の訪れであり、この意味でも死者からの継承を表しているのがわかるであろう。

引用 · 参考文献

- Freeman, Evelyn B. . “ Children's Books: Ways of Words. ” *The Reading Teacher* , Apr., 1997, Vol. 50, No. 7 (Apr., 1997), <http://www.jstor.com/stable/20201826>, pp. 588-97.
- — — . “ Children's Books: Voices. ” *The Reading Teacher* , Oct., 1996, Vol. 50, No. 2, Children's Choices Favorite Books for 1996 (Oct., 1996), <http://www.jstor.com/stable/20201731>, pp. 152-9.
- Giorgis, Cyndi. “ Children's Books: The Language of Story. ” *The Reading Teacher* , May, 2001, Vol. 54, No. 8, Embracing Pluralism Worldwide, Part 2: Classrooms in the U.S. (May, 2001), <http://www.jstor.com/stable/20204998>, pp. 824-34.
- Johnson, Nancy J. . “ Children's Books: Identity. ” *The Reading Teacher* , Feb., 2000, Vol. 53, No. 5 (Feb., 2000), <http://www.jstor.com/stable/20204816>, pp. 432-40.
- — — . “ Children's Books: Literature in the Reading Curriculum. ” *The Reading Teacher* , Apr., 2003, Vol. 56, No. 7, Positions and Programs: How Are They Changing the Face of Literacy Instruction (Apr., 2003), <http://www.jstor.com/stable/20205276>, pp. 704-12.
- Kaser, Sandy. “ Searching the Heavens with Children's Literature: A Design for Teaching Science. ” *Language Arts* , MARCH 2001, Vol. 78, No. 4, CROSS-CURRICULAR CONVERGENES (MARCH 2001), <http://www.jstor.com/stable/41483159>, pp. 348-56.
- Martinez, Miriam G. . “ Children's Literature and Reading Instruction: Past, Present, and Future. ” *Reading Research Quarterly* , Jan. - Feb. - Mar., 2000, Vol. 35, No. 1 (Jan. - Feb. - Mar., 2000), <http://www.jstor.com/stable/748293>,

pp. 154-69.

Murphy, Pamela. "Discovering the Ending in the Beginning." *Language Arts*, July 2003, Vol. 80, No. 6, Current Explorations (July 2003),

<http://www.jstor.com/stable/41484159>, pp. 461-9.

Nicola-Lisa, W. . "What Writers Write, What Editors Want: On the Creation of a Children's Picturebook." *Language Arts*, March 1994, Vol. 71, No. 3, CHILDREN'S AND ADOLESCENT LITERATURE: WRITING, ILLUSTRATING, PUBLISHING, READING, RESPONDING, TEACHING (March 1994), <http://www.jstor.com/stable/41961951>, pp. 172-9.

Rylant, Cynthia. *Missing May*. Scholastic, 2003.

Saccardi, Marianne. "Children Speak: Our Students' Reactions to Books Can Tell Us What to Teach." *The Reading Teacher*, Dec., 1993 - Jan., 1994, Vol. 47, No. 4 (Dec., 1993 - Jan., 1994), <http://www.jstor.com/stable/20201254>, pp. 318-24.

Taberski, Sharon. "From Fake to Fiction: Young Children Learn About Writing Fiction." *Language Arts*, October 1987, Vol. 64, No. 6, Literacies (October 1987), <http://www.jstor.com/stable/41961650>, pp. 586-96.

Wood, Karen D. . "Collaborative Literacy: Lessons Learned from Literature." *The Reading Teacher*, Oct., 2001, Vol. 55, No. 2 (Oct., 2001), <http://www.jstor.com/stable/20205020>, pp. 102-11.